



# 学習院大学史料館 ミュージアム・レター

Gakushuin University  
Museum of History

## Museum Letter No.42

発行日 ● 令和元年(2019)12月20日

もくじ

ごあいさつ・辻邦生没後20年に寄せて……………	1
祝文の話など……………	2~3
辻邦生山荘の軽井沢 「辻邦生生誕100年記念事業」のお知らせ……………	4



昭和37年(1962)頃 東京・国分寺自宅2階の書斎にて

### ごあいさつ

辻邦生先生がお亡くなりになってから、今年で20年が経ちました。先生の自筆原稿や創作ノートなど、さまざまな資料を収蔵している学習院大学史料館は、本年6月に『辻邦生 永遠のアルカディアへ』を刊行しました。また、同月29日に開かれた史料館講座「没後20年 辻邦生を語る」では、坪戸雅彦先生と松浦寿輝先生に、辻文学をさまざまな角度から読み解きたいへん興味深い講演をしていただきました。辻先生の命日の前日である7月28日には、朗読会「声でつむぐ辻文学」を開催しましたが、4人の大学生が『廻廊にて』の登場人物になりきって、生き生きとした朗読を披露してくれました。

今なお多くの人々の心をとらえて離さない辻文学。このミュージアム・レターでは、辻先生とゆかりの深い方々が、辻文学の背後にある、先生の思想やお人柄などについてご紹介くださっています。貴重な原稿をお寄せいただき感謝申し上げます。

(史料館長・水野謙)

### 辻邦生没後20年に寄せて

辻邦生生誕100年記念事業組織委員会委員長  
学習院大学文学部フランス語圏文化学科教授

中条 省平

辻邦生が亡くなったと知らされたあの夏から、もう20年が過ぎたとは。月並みながら、歳月の経過の速さには、目の眩む思いがします。

私が辻邦生の文学と出会ったのは、1972年、高校3年で『背教者ユリアヌス』を読んだときのことです。時間的にも空間的にもはるか遠い古代ローマの皇帝を主人公にして、こんなに生き生きとヨーロッパの精神的源流の風景を描くことができるなんて、と私は大きなショックを受けました。これほどスケールの大きな叙事的作品は、当時の日本文学のあり方からは想像もできないものでした。

高校卒業後、私は数年間、親をだまして大学に通っているふりをし、その後嘘がばれて、進退きわまりました。それで、ゼロからフランス語を勉強すると親に誓って、当時、日本でいちばん優れたフランス文学者を集めていた学習院大学フランス文学科に入学しなおしたのです。辻邦生はその教授の1人でした。

辻先生の講義の内容はあまり覚えていません。それよりも、授業のあいだにふと洩らす、「私は吸血鬼ですからね、若い皆さんの生き血を吸って生命力を蓄えるんです」とか、「今はこの瞬間一度きりですよ、後でとか、明日とか、そんなものはないんです」といった言葉にどきりとする興奮を覚えました。

その数年後、私は辻邦生の同僚になったのですが、研究室より映画の試写室の方でよく会ったような気がします。先生に誘われて試写の直前10分間で階下の中華料理屋に行きラーメンを食べたこともあります。ああ見えて辻邦生は大食漢なのです。それは、いま・ここで生きる喜びをただちに味わわなければならない、という哲学の実践だったのかもしれない。

辻邦生が亡くなって20年。その後、世界は歴史や哲学から真剣に学ぼうとはしない人々によって支配される度合いが高まっている気がします。こういう時代に、いま・ここで最善を尽くしてこそ永遠の喜びに触れることができる、という辻邦生の思想は、いっそうまばゆく光り輝くように思われます。